日小整会誌（J Jpn Ped Orthop Ass）21(2)：339. 2012.
第22回日本小児整形外科学会学術集会　主題

手の先天異常

座長：高　山　真一郎

本主題には手の先天異常について5題の報告があったが，いずれも新しい知見を含んだ発表内容であった．

大阪市立総合医療センター中川敬介先生は，裂手症の第1指間狭小化例に対して，示指基部を1周する皮切を用いて示指を尺側に移動，裂手部分の指間陥凹を閉鎖するとともに，この余剰部分を用いて第1指間を形成するUpton法の経験を報告した．適応の制限はあるものの，Snow-Litter法と比較して簡便で安全な方法と評価された．国立成育医療研究センター谷渕綾乃先生は，屈指症の基節骨骨頭および中節骨近位骨端核の形状変化を，3つのパラメーターを用いて定量的に評価する方法を考案した．その結果，基節骨骨頭扁平率・基節骨頚部くびれ率・中節骨近位骨端核前方拡大率のいずれの評価項目とも屈指症では有意な変化を認め，その形態異常を定量的に評価することができた．札幌医科大学射場浩介先生は，母指多指症手術の際に，末節骨あるいは基節骨基部の軟骨の状態を把握する目的で術前関節造影を行い，その有用性を報告した．国立成育医療研究センター関敦仁先生は，前腕の短縮を伴うMadelung変形では，手関節だけでなく腕橈関節を再建することが治療上重要と述べた．国立成育医療研究センター中村千恵子先生は，VATER連合における橈側列異常の特徴について報告し，母指形成不全では重症型の比率が高いこと，母指多指症では尺側母指が低形成な稀なパターンが見られたことを報告した．